

作業ニーズを満たすケアを行った結果、BPSD が軽減した認知症高齢者の一事例 ～ICF の「活動・参加」と関連しながら～

渡辺病院 作業療法課

板井裕美 福田恵子

井畑宏敏 植田浩次 下村瑠衣

【目的】認知症高齢者と関わる際「その人が必要としている意味ある作業」に焦点をあてることが重要であると言われている。そこで今回我々は、主体性を尊重し、必要としている作業に焦点をあてたケアを行った。その結果、BPSD が軽減し、ICF の「活動・参加」の達成も可能となったため、若干の考察を加えて事例を報告する。

【倫理的配慮】当院倫理委員会の承認を得、個人情報保護にも留意したうえ、本人、ご家族に発表の旨を説明し同意を得た。

【事例】A 氏、80 歳代後半、女性、アルツハイマー型認知症。夫が入院した頃から、嫉妬妄想が出現した。その後、A 氏は別の施設に入所したが、「夫に会いたい」と無断外出が頻発したため、精神科病院に入院した。入院後も職員に対して蹴るなどの行為がみられた。認知症自立度 M、障害自立度 A1、HDS-R19 点

【方法】無断外出、暴力などの BPSD を「夫に対する思いの不適切な行動化」と捉え、まず BPSD を軽減し、安定した生活をおくることを目標として挙げた。そこで、「主体性を尊重した作業ニーズ」を探求した。その結果、「妻としての夫に対する役割活動」が必要であると思われる、作業内容を上記を満たす活動へと転換した。

【結果】同じ敷地内の施設に入所している A 氏の夫のもとへ作業療法士が同行し、夫の世話の実施を実現した。次に夫の部屋の備品作成を提案したところ快諾した。作成中、スタッフや他の患者との会話も弾むようになった。この頃より、参加することのなかった他の作業療法にも積極的に参加するようになった。その後、現在まで概ね穏やかな状態で過ごしている。

【考察】今回、「作業ニーズを満たすケア」を継続して行ったところ、BPSD が軽減し、他の作業活動への参加といった ICF の「活動・参加」の達成にも繋がった。このことから、「作業ニーズを満たすケア」の継続は、認知症高齢者においてもアイデンティティを確立し、「その人らしい生活」が取り戻す可能性が示唆とされた。